

性教育を実施したタンザニア農村部の中学生の自尊感情

医学研究科 修士課程 2年

伊藤 恵子

タンザニア

2019年10月7日～2019年11月13日

計画の概要

2015年に採択されたSDGsのゴール3には、すべての人に健康と福祉をという目標が掲げられている。開発途上国ではこのゴールを達成するために、妊婦健診や出産費用などを無料にし、妊娠中から妊婦が適切なケアを受けることができるように取り組みが行われているが、未だサハラ以南のアフリカ諸国では妊産婦死亡率は高い状況である。若年妊娠は、分娩経過が遷延する、分娩時多量出血となる、妊娠を周りに知られないよう危険な中絶が行われることもある、といった理由などから妊婦死亡率増加の大きな要因となると考えられている。特に東アフリカでは危険な中絶による妊産婦死亡問題が世界で最も深刻で全妊産婦死亡のうち18%を占めると言われており、また、今回の調査地であるタンザニアの女子の2人に1人は19歳までに最初の妊娠を経験するという報告もされている。タンザニアの中学・高校に通う生徒は、妊娠が発覚すると退学を余儀なくされるため、妊娠はその後の人生にも大きな影響を与える。さらに上述のような身体的リスクに加え、子育てをする上で十分な収入が得られないといった経済的困難ももたらす。また、難産や遷延分娩は膣などに瘻孔（Birth Fistula）があいてしまい腸や膀胱とつながることで、常態的に失禁が止められなくなるリスクも抱えている。治療を受けなければ排泄機能の障害が治る見込みはなく、社会的にも隔離、差別される困難をもたらす。

こうした困難を予防するための方策の一つに、性教育がある。現在タンザニアでは授業として保健や性教育の時間は設けられていない。しかし、学校で性教育を受け正しい知識をもち、日ごろから性に関する問題を自分のこととして考える時間を設けることができれば、若年妊娠や性に関する様々な問題から身を守ることができると同時に、学業を継続することもできるだろう。

今回調査地としたタンザニアのタンガ州コログウェ県では、指導教官が所属するNPO法人（Class for everyone）が、子ども教育を専門とする現地NPO（New Rural Children Foundation）と、JICA草の根協力事業としてパートナーを組んで活動しており、独自に作成した教材を用いて2016年より現地の小学校で性教育を行っている。また、中等学校（4年制）においては、モデル校として6校において、予めNPOスタッフによってトレーニングを受けた生徒が性教育を行うpeer educationが行われている。

タンザニアにおいて学校で性教育を行う上で、生物の教員が学校に配置されていないなどの理由から、誰が教えるのかといった課題があった。Peer education は、生徒が主体となっていて行われる性教育であるため、教える人がいないという課題を解決することができ、さらに継続性を考えた上でも有効な手法であると考えられている。しかし実際にタンザニアの中学校において Peer education 手法を用いて行われる性教育に対する生徒の認識や、性教育を受けることによって生じる生徒の心理的変化に関する研究はほとんど行われていない。

本研究では実際に Peer educator として活動をしている生徒が Peer education 手法による性教育をどのように捉えているのかといった認識調査、困難や課題はなかったかといった現状把握、また Peer educator に性教育を受けた生徒はどのように感じているのか、性教育開始前後の心理面での変化を確認することを目的とし、モデル校となっている中学校6校において Focus Group Interview(FGD)を実施した。

成果

本研究の調査地であるタンガ州コログウェ県は、タンザニアの商業都市ダルエスサラームから約 300km 北西に位置している。今回渡航した時期は例年であれば小雨期であるのだが、今年は例年以上の雨が降ったことで主要道路の多くが浸水し、調査地までの移動が困難となった日もあった。

今回調査の対象とした中等学校 6 校では、現地 NPO (NRCF) のスタッフがサポートし、Peer education 手法を用いた性教育が実施されていた。性教育の主体となっている各学校の Peer educator は、2019.3 月に NRCF のスタッフでもある助産師からトレーニングを受けた上で活動を開始し、約半年が経過していた。今回の調査では、Peer educator ならびに、Peer educator によって性教育を受けた生徒を対象に、各学校で Focus Group Discussion(FGD)を実施した。

FGD の中で性に関する話題も出てくる可能性を考え、生徒が話しやすい環境を作るために、今回 FGD は男女別に実施した。そのため FGD は合計 11 回 (6 校のうち 1 校は女子校であったため、FGD は 1 度のみ実施)、6 日間に渡って実施し、調査対象者である生徒の同意を得た上でインタビューは録音させてもらった。また、先行研究をもとに事前に作成したインタビューガイドを用意し、インタビューは調査者である私がファシリテーターとなって行ったが、現地語であるスワヒリ語で実施したため、お互いのコミュニケーションがよりスムーズにいくように NRCF のスタッフを調査協力者として依頼し、難しい言葉の通訳などのサポートなどを行ってもらった。



写真1 調査に協力してくれた NRCF スタッフ

スワヒリ語を英語と日本語に翻訳し、結果に関しては現在分析中であるが、Peer

education 手法による性教育に対しては否定的な意見は聞かれず、生徒たちは肯定的に捉えており、今後も継続していくことを望んでいることが分かった。その理由としては、「今までこういった性に関する話を聞く機会がなかった」、「正しい知識を得ることができた」、「改めて若年妊娠の弊害や怖さを知る機会となった」などの意見があげられていた。少し具体例を紹介すると、Peer educator として活動している生徒からは、「最初は自分にできるか不安だったけれど、友達に話をして友達が分かってくれたり、態度を改めてくれる姿を実際に見ることで、自分の自信につながった、これからももっと教えていきたい」、「先生と呼ばれることが嬉しくて、モチベーションになっていた」、「教えている中で自分自身も友達から学ぶことがあった」といった意見が聞かれていた。また、Peer educator から性教育を受けた生徒からは、「同じ生徒の立場なのに先生として話していて、聞いても意味がない、時間の無駄だと思ったけれど、何回も続けて話をしてくれて、その中で段々と友達が大切なことを教えてくれていると分かった」、「同じ生徒同士だから、思っていること考えていることを隠すことなく話すことができた」といった意見などが聞かれていた。さらには、「性教育を受ける前は異性に興味があって、勉強も不真面目だったけれど、性教育を受けて、今は勉強をしなきゃいけない、自分が変わることができて本当に良かった」と言ったように、具体的な経験談なども交えて話してくれた生徒も多く、中学生の率直な意見を聞くことができたと考えている。今回 Peer educator だけでなく、実際 Peer educator に教えてもらった生徒も一緒にインタビューしたが、Peer educator にとって自分が性教育をした友達の思いや意見を聞くことができる機会となり、彼らのモチベーション向上になったように感じられ、設定としても効果的であったと考えている。インタビューの内容からは、Peer education による性教育を実施することで、教える側である Peer educator、教えられる側である生徒のいずれにおいても、心理面において何らかの変化が生じていることが見てきたが、今後さらに分析を進め、しっかりと考察していきたい。



写真2 FGD 実施の様子



写真3 雨で道路が冠水してしまった調査地までの道のり。学校が目の前にありながら行くことができなかった日もありました。